

## 第23回 沖縄科学技術大学院大学学園の今後の諸課題に関する検討会 議事録

1. 日時：令和2年7月29日（水）15:30～17:40
2. 場所：Skype会議／中央合同庁舎8号館14階内閣府沖縄振興局長室
3. 出席者
  - (1) 構成員  
相澤座長、西澤委員、大島委員、岡崎委員、長我部委員、小柴委員、瀧澤委員、  
宮浦委員、山本委員
  - (2) 内閣府  
原沖縄振興局長、水野審議官、田村総務課長、中島次長、宮腰企画官
  - (3) OIST  
グルース学長、バックマン首席副学長、コリンズプロボスト、吉尾COO、芝田副学  
長、レイ副学長ほか

○相澤座長 皆様、私の声が聞こえますでしょうか。

定刻となりましたので、ただいまから、第23回「沖縄科学技術大学院大学学園の今後の諸課題に関する検討会」を始めます。

お忙しい中、御出席をいただきまして、誠にありがとうございます。

本日は、委員の皆様は、9名全員おそろいでございます。

新型コロナウイルスの感染には、なお、警戒が必要という状態でございますので、本日も、前回と同様にスカイプによるウェブ会議とさせていただきます。

OIST側からの出席者は、グルース学長、バックマン首席副学長、コリンズプロボスト、吉尾COO、芝田副学長、レイ副学長、スコグランド研究科長、山本研究担当ディーン、プロヒット教員担当学監、ピーチシニアアドバイザー、そのほかOIST関係者の方でございます。

なお、内閣府沖縄振興局からは、中島次長、宮腰室長が参加しておりますが、原沖縄振興局長、水野大臣官房審議官、田村沖縄振興局総務課長は、別途用件がございますので、後ほど出席していただく予定でございます。

それでは、議事に入る前に、本日の議題及び資料、スカイプ会議の注意事項について、事務局より説明をお願いいたします。

○中島次長 中島でございます。

本日の議題は「1. 令和元（2019）年度事業報告について」「2. OISTの10年後見直し」についてでございます。

10年後見直しでは、中間取りまとめ案に関する審議、最終取りまとめに向けた確認事項等についてを予定しております。

配付資料については、一つ一つの確認は行いませんが、議事次第に掲げているとおりで

ございます。

このほかに、机上にOISTから提出された、中間取りまとめに対する意見を配付させていただきました。また、前回同様、これまでの会議に提出された資料等も、参考資料として配付しております。

本日は、二度目のスカイプによるウェブ会議となっております。皆様に特に御注意いただきたい事項は、前回と同様でございますが、ハウリングを防ぐために、発言をされる際を除き、マイクはミュートをお願いいたします。

御発言される前には、冒頭、必ずお名前をお知らせください。

委員の皆様の接続環境が異なるため、音声のみの御出席となる方や、スカイプで表記されている名前と出席者が異なる場合がございます。

この検討会は、報道関係者が傍聴されています。傍聴されている方もマイクはミュートをお願いいたします。

会議中に接続トラブル等がございましたら、スカイプのチャットでお知らせいただくか、お手数ですが、事務局にお電話をくださるよう、お願いいたします。

私からは以上です。

○相澤座長 それでは、早速、議事に入らせていただきます。

議事の説明の後に発言をいただく場合、先ほどありましたように、御自分のマイクのミュートを解除して、お名前を言って、挙手という形にしてください。私から指名をさせていただきます。

それでは、初めの議題「1. 令和元（2019）年度事業報告について」OISTから説明をお願いいたします。

○吉尾C00 OISTの吉尾でございます。

私のほうから、資料2によりまして、令和元年度のOISTの業務実績報告の概要を御報告させていただきます。

業務実績報告につきましては、毎年度の事業計画に照らして、果たしてどれだけの実績が上がったのかということを自己評価しておるものでございまして、既に令和元年度の報告につきましては、5月の評議員会、理事会を経て確定いたしておりまして、本学のホームページで実績報告結果は公表されておるものでございます。

報告書そのものは、大変大部なものでございますので、今日は、概要のみの報告とさせていただきます。

まず評価グレードの定義でございますが、A+からDまで、御覧のような定義でもって評価をいたしております。

評価のプロセスでございますけれども、基本的に各部署におきまして、実績報告のドラフトを作成いたしまして、これを学長に説明し、学長がコメントするという形で、各部署と学長との間の行き来があったものが、評議員会、理事会に提出されて、議論をされて、確定するというプロセスを経ております。

こちらが五つの章立てに沿った、それぞれの項目の評価です。項目ごとの評価は、御覧いただきますとおり、全てAという形になっております。

次のページをご覧くださいますと、それぞれの章立ての中に小項目が出てまいりまして、それぞれの項目について、一つ一つ評価をA+からDまで行ったものが相対としての項目の評価ということで出ておりますが、今日は、各項目の内訳の中でA+からDまでございますが、その中の特に計画どおり進まなかったもの、以下、B、C、Dのものを御紹介させていただきます。

スライドの8ページになります。「第1章 教育・研究」ということになっておりますけれども、全体がA評価ではございますが、B評価としたものがございます。

何かといいますと、OISTにおきましては、大学院に入学する予定の学生に対しまして、英語教育等のプログラムを提供いたしております。令和元年度は7名の学生にそのプログラムを提供いたしておりますけれども、そのプログラム内容の改善を果たしたいという計画を立てておりましたが、その改善計画の一部が延期されたことにつきまして、B評価という結果になっております。

スライドの9ページ目に「第2章 ガバナンス及び業務運営の透明性」の項目でございます。幾つかB評価をつけたところがございます。

最初、2107の番号を振っておるものがございますが、若干書いておることが分かりにくい表現になっておりますけれども、内閣府とOISTの間では、四半期協議会といった会合を通じて、連携を図っておるところでございますけれども、特に昨年度は、予算獲得の面におきまして、補正予算の機会などがあったときに、働きかけが果たせなかったのではないかという反省から、さらなる内閣府との連携の強化改善の余地があると判断をいたしまして、Bとしております。

2108、2110につきましては、どちらもIT関係の活動でございますけれども、人員の関係で予定の計画が遅延した、ずれ込んだことに伴いまして、B評価をつけております。

スライドの10ページの下の方でございますが、人事管理のところでは全体はA評価としておるものがございますけれども、C評価としたものが一つございます。

障害者雇用の点で、人員が若干異動したということに伴いまして、計画どおりの実施が行えなかったということで、C評価を付しております。

次のページ、B評価を下したものが一つございます。2409、これにつきましては、教職員に対する研修を実施いたしておりますけれども、オンライントレーニングは実施できておりますが、対面での研修プログラムを再構築するという計画は、研修担当者が異動したということに伴いまして、行えなかったというもので、B評価を付しておるものがございます。

スライドの12ページになります。一番下を御覧ください。唯一D評価を付した項目がございます。4134という番号を付しておるものがございますが、「同クラブ」と書いておりますけれども、これはOISTファンクラブを設立しようという計画をいたしておったもので

ございますが、ファンクラブ設立に当たるべきスタッフについて、人的制約があることから、ほかのプログラムを優先せざるを得なかったということで、この設立計画そのものは見送られたということで、D評価を下したものでございます。

ほかの項目については、A、あるいはA+という評価をしておりますが、全体的にA評価を令和元年度の業務実績について、OISTとしては評価したという結論でございます。

以上です。

○相澤座長 それでは、ただいまの説明に対して、御質問等ございましたら、お願いいたします。いかがでしょうか。

それでは、特段の御意見等もございませんようですので、この議題については、以上とさせていただきます。

次の議題は「2. OISTの10年見直し」の中間取りまとめの案についてであります。

前回の検討委員会でも、中間取りまとめについての基本的なフレームワークを示してきたところであります。そして、その中身についての議論も進めてまいりました。

そこで、今回、提示させていただいている中間取りまとめの案になりますが、前回のたたき台にさらに評価という部分を明確にしていまいりました。ランクを明確に設定して評価するというよりは、おおよそのランクを想定できるような立場での書きぶりにしてあります。

なお、これは最終決定ではございませんので、今後、さらに検討を深めていくというものであります。今回のものは、中間取りまとめの段階でのまとめでございます。

そこで、中身としては、評価の部分の書きぶりを中心にこれから議論を進めていただきたいと思っております。

それでは、中間取りまとめ案の全体につきまして、内閣府から説明をお願いいたします。そして、全体でございますけれども、全体像の説明の後、各評価項目別に議論を進めさせていただきます。

それでは、説明をお願いいたします。

○中島次長 それでは、内閣府から中間取りまとめ案の全体的な説明をさせていただきます。

資料3-1でございます。

資料3-1全体を通しまして、前回検討会での御議論を踏まえて、加筆、修正をさせていただきます。

先ほど座長から趣旨の御説明がございましたけれども、前回、たたき台をお示しさせていただいておりましたが、各論の中で評価及び今後の検討の方向性として、黒枠で囲っていた部分があったと思っております。その部分を今回、評価という項目といたしまして、書きぶりにつきましても、それぞれの評価の視点に対して、確認した事項を踏まえて、検討会としてどう評価するのかということが明確になるような形としております。

また、前回、座長より今後の総括的議論に向けた留意点ということで、座長提言をお出

しいただいておりますけれども、そちらも中間取りまとめ案の最後の15ページにございますが、そちらにおつけをするるとともに、確認した事項のデータ等を含めまして、OISTに関するファクト集というか、基礎資料のようなものですけれども、資料3-2として、中間取りまとめの補足資料としておつけしております。

全体構成については、以上です。

○相澤座長 全体の説明がございましたけれども、これについて、御質問がありますでしょうか。この後、各評価項目についての説明と意見交換に入ります。

全体の構成については、よろしいでしょうか。

それでは、まず初めに「1. 組織運営」という評価項目、ここに関わることから進めたいと思います。

組織運営については、前回、私からOIST側に組織運営についての組織図、その他の資料提出をお願いいたしました。その説明資料を今回の補足資料として加えてあります。さらにそのことを受けて、評価の項目の中の組織運営について補強してあります。

そこで、OIST側から提出いただいた資料について、OISTからの説明をお願いしたいと思います。

○吉尾COO OISTの吉尾のほうから説明させていただきます。

資料3-2のスライドナンバーが5番目になりますが、御覧いただいておりますでしょうか。今回「OIST Management/Operation Organization/沖縄科学技術大学院大学 管理・運営体制」という図を改めて提出させていただきました。

組織運営の資料につきましては、お手元の資料3-2の最初の部分に、内閣府で作成いただきました、特に学園の法人組織を中心として、理事会、評議員会が全面的に書かれた資料がございますが、私どもから最初の会議のときに提出させていただきましたものは、大学の中での状況を書いたものを出しております、そこで大学法人と大学の運営組織の辺りがよく分からないということではなかったところから、改めて理事会、評議員会と大学の中の組織を合わせた形でださせていたいただいているというのが、今回、お示ししている図になってございます。

上部の理事会、評議員会という構造は、私立学校法に基づく理事会、評議員会の構造そのままでございます。理事長が学長を兼ねているという形で、そのまま下に大学の運営組織が示されております。

左側は、いわゆるマネジメントの組織としてまとめておるものです。

右側は、大学院の運営組織で、教授会、プロボスト、研究科長、教員担当学監、研究担当ディーンが並ぶという形を作っております。

左側は、シニアアドバイザー、統括弁護士、最高情報責任者、最高コンプライアンス責任者、広報担当の副学長、大学コミュニティ支援担当の副学長、そして、事務の取りまとめ、チーフオペレーティングオフィサー、財務担当の副学長、施設管理担当の副学長、人事担当の副学長、情報技術担当の副学長がいるという構造を示させていただきました。

実際に理事長の下での大学の日々、運営に当たって、いかにスピーディーに運営を行うかというOISTとしての特色ある体制としては、エグゼクティブ委員会が設置されており、図の真ん中に書いてございます。

エグゼクティブ委員会の構成員につきましては、色のついた丸でそれぞれ構成員を示させていただきます。

学長のところから線が出ておりますけれども、運営幹部会議、Upper Management Meeting というものが毎週ある形で、運営全体の言わばステアリングコミティーという形で設置されていることも図示させていただきました。

運営幹部会議の構成員につきましても、違う色で印をつけた者が構成員になっていることを示させていただきます。

若干分かりにくかった構造が少しでも明確になったと思いますが、よく御覧いただきたいと思います。

以上です。

○相澤座長 ありがとうございます。

ここで補足させていただきますが、前回、グルース学長に質問いたしました点は、学園という法人組織が、大学をどう運営しているかというところの学園と大学の組織のつながり、これがよく分からないので、組織図を基に明解なる説明をお願いしたいという視点でございました。

本日の中間取りまとめの全般に学園という言葉と大学という言葉が使い分けられて出てまいります。これが今回の組織図に対応しているところです。国立大学法人の組織と対応していただくと、非常に分かりやすいのですが、国立大学法人という組織と国立大学という組織の関係であります。

それでは、ただいまの組織図を中心としたことについての御質問がありますでしょうか。よろしいでしょうか。

これは前回というよりも、かなり前に既に組織図そのものとしては御覧になっていることだと思います。

それでは、中間取りまとめの具体的な内容で「1. 組織運営」について、説明をお願いいたします。

○中島次長 それでは、事務局から御説明いたします。

資料3-1を御覧ください。修正を反映させた部分まで、御説明いたします。

先ほど座長からありましたけれども、文章上、きちんと区別されるような記載としております。

2ページ目、確認事項のところでございますけれども、一つ目のポツでは、学園と大学の関係を明確化するとともに、3ページにまいりますけれども、ポツで理事会や評議員会の構成について、加筆をしております。

3ページ目の一番上でございます。先ほども御説明がありましたけれども、理事会が世

界中からOISTの理念を踏まえた理事長適任者を選任して、学長を兼ねさせているということを加筆しております。

そのほか、3ページ目の上から五つ目でございます、「学長の意向」と始まるポツですけれども、OISTの大学内の運営体制について、書き下すような形としております。

評価でございますけれども、理事会のメンバーや理事会の役割、学長の選任方法などを確認した事項を引きながら、OISTの学園形成体制、設立理念に照らし、独自性のものとした上で、世界最高水準の教育研究を行う大学運営にふさわしい組織体制を構築し、機能していると評価できるとしております。

4ページを御覧ください。今後というところでございますけれども、日本の研究大学の組織運営体制においても、生かせるポイントを明確にする。また、これまでに構築された組織運営体制が効果的に運営され、十分に機能しているか、さらに明らかにしていく必要があるとしております。

以上です。

○相澤座長 ただいまの「1. 組織運営」についての評価の部分で、先ほど申しましたように、学園という組織と大学、この二つの組織を明確に区別し、それぞれについて、どう機能しているか。そして、これが他の大学についても、モデルとして機能できるようなものもあるというような意味での評価としておるところであります。

ここについての質問、御意見がございましたら、お願いいたします。いかがでしょうか。西澤委員、お願いいたします。

○西澤委員 西澤でございます。

評価の前半部分のところはいいと思うのですが、先ほどの具体的なマネジメントの構成図等を伺った上で、ここに「日本の他の研究大学におけるモデルケースとなり得るよう」と書いてあるのですが、まだこのところが少し分かりにくいということが一つあります。

OISTの特性として、どちらかという、日本的に言うと、私立大学のいわゆる法人と教養を分けるという構造になっていると思いますし、研究大学と言ったときには、旧帝国大学などを中心とした国立大学を考えていると思うのです。

そのときに、今、述べられているOISTの組織運営というのは、どこが一番モデルとして普遍性を持って、日本のどのレベルの大学のどこを改善する一つの指標になるかということが、まだ少し分かりにくいという気がしてまして、ぜひその辺ももう少し具体的に示していただくということが必要ではないかと感じます。

以上です。

○相澤座長 ただいまの御発言に対して、OIST側からコメントはありますでしょうか。お願いいたします。

○グルース学長 私からコメントさせていただきます。

明確にしなければならないところはたくさんあると思います。そして、こういった機能

が異なるシステムで実行可能なのかということですが、ほかの大学では同じようにはできないかもしれません。より深く知るため、国立大学や奈良先端科学技術大学など、5人の学長をお呼びして、御質問の中心となるエレメントについて、お話をしたいと思います。こういったところが組織であり、このように役割があるということを御説明した上で、意見交換をさせていただければと思います。ほかの大学の学長たちから、こういったところがほかの大学でも適用が可能なのかということの意見をいただきたいと思います。

オーストリアとは、OISTではこのように組織運営をしているということで、意見交換しております。全く同一ではありませんけれども、ディスカッションをして、意見交換をして、OISTのどこを日本の大学制度に応用できるのかということの議論したいと思っております。

○相澤座長 この点については、もう少し機能が本当に意図したとおりに動いているのかどうか、これはむしろ今後の検討課題とさせていただきます。

どうぞ。

○グルース学長 OISTが機能しているかどうかという質問ではなく、どこの部分をほかの国立大学に応用することができるかという問題だと思います。

評価を見てみますと、ガバナンス、運営会議について、特に批判ということはないと感じております。

○相澤座長 グルース学長のおっしゃるとおりで、マイクが通じていなかったようですが、先ほど申し上げたことは、OISTが提示されている組織、ファンクションは、現時点で考えると、非常にいい設計になっていて、いろいろなところから見ると、機能も発揮されているのであろうという段階です。

さらに進んで、実際にこの機能がどう働いているかどうかについては、今後の検討です。例えば実際にこれからサイトビジットをいろいろと企画するわけですが、その際の一つの課題になると思います。

西澤委員、そういう理解でよろしいでしょうか。

○西澤委員 今、どういうふう動いているかということについての問題ではなくて、座長が御指摘のような機能も含めて、今後のモデルといったときの中身です。これについて、具体的に知りたいということですから、おっしゃるとおり、実際にどう動いて、効率的で、他の大学も学ぶべきだということが明確に分かれば、それをむしろ積極的にOISTの成果として打ち出していく必要性があると感じています。

以上です。

○相澤座長 そういう御理解で結構だと思います。

それでは、そのほかの点、いかがでしょうか。宮浦委員、お願いします。

○宮浦委員 今の点なのですが、恐らくモデルというお話があったのですが、モデルという単語を使うと、モデルとして近づけなければいけないというニュアンスが若干出てしまうと思うのです。モデルにするというよりも、OISTのすばらしい点、特殊性も含め



て、部分部分で参考にさせていただくという考え方が重要だと思うので、恐らくそういう議論になっていると思うのですけれども、モデルということになると、そのモデルに向かってほかの大学が近づいていかなければいけない、総価値的にイコールに近づいていかなければいけないという誤解を招く可能性があることを少し感じました。

以上です。

○相澤座長 ありがとうございます。

宮浦委員、具体的に評価の文章ですが、ここの部分はこう直したほうが良いというコメントはございませんでしょうか。

○宮浦委員 「モデル」という使い方は、少し誤解を招く心配があるということです。特に問題がなければ、結構だと思います。

○相澤座長 ありがとうございます。

それでは、そのほかのコメントはいかがでしょうか。

それでは、ただいまの「1. 組織運営」については、以上とさせていただきます。

第2の評価項目は「2. 教育研究」であります。

それでは、この部分の特に評価について、事務局より説明をお願いいたします。

○中島次長 事務局から説明をさせていただきます。

教育の部分についてでございます。確認した事項につきまして、少しデータの加筆を行っております。

評価の部分は、5ページを御覧ください。下のほうでございますけれども、アドミッション・ワークショップを通じて、国内外から優秀な学生を選抜し、グローバルな教育研究環境が提供されている。こういった教育研究環境は高く評価できるとしております。

ラボローテーションなど、創造性や独自性に富んだ学際的な教育活動を展開しており、昨年11月に実施された外部評価委員会においても、学生の質の高さは、著名な研究大学等に匹敵すると評価されておりました。世界最高水準の教育及び必要な支援を提供していると高く評価できるとしております。

今後についてということですが、琉大、高専といった県内の教育機関とのコラボレーションをさらに深めていくことも、学生にとって必要と考えられるとしております。

続きまして、研究の部分でございますけれども、確認した事項の②の部分で、少し加筆をさせていただいております。

7ページの「②研究の水準・成果等」というところですが、三つ目、学際的な論文の割合について、少し追記をさせていただいております。

評価でございますけれども、8ページの上のほうを御覧ください。国際公募により、卓越した教員を採用していること。採用後は、研究に高い裁量権を与える一方で、外部の評価委員による厳しい業績評価を課すなど、他の海外の有力研究大学・機関に倣った独自性の高い取組を実施しており、世界最高水準の研究大学としての研究実施体制の構築に取り組んでいると高く評価できるとしております。

特にNature Index 2019のランキングについても、記載してございますけれども、設立後10年が経過していない中で、国際的に卓越した研究成果を創出していることが極めて高く評価できるとしております。

今後でございますが、研究大学として、さらに存在感を高めていくために、OISTにおける強みとなるような研究分野をさらに伸ばしていくための戦略や、これまでの学際的な研究を通じて明らかになった新たな研究領域を示していくことが期待されるとしております。以上です。

○相澤座長 それでは「2. 教育研究」についての評価のところをどう御理解いただくかということで、御意見等ございましたら、お願いいたします。

個々には説明はありませんが、補足資料というところとじ込みのところに、関連する根拠、エビデンス、そういうものがそれぞれ記されております。これは主立ったものだけをそこにファイルしてあります。

山本委員、どうぞ。

○山本委員 山本です。

教育と研究、それぞれ1点ずつございます。

教育については、沖縄振興とも関係があるのですが、学生がどの国から来られても、学生の就職先として長い期間を取っていただいていると思うのですが、沖縄振興との関わり合い、資料にもお一人の方は琉球大学にポスドクで入られているという資料があるのですが、今後、これについての何らかの検討が必要ではないのかというのが1点目です。

研究につきましては、評価のところにも非常に優秀な研究業績を上げておられるということが書いてあるのですが、それを裏づける先ほどのモデルという話とも関連するのですが、人事制度です。いわゆる教員スタッフに対する人事制度がプラスに働いているのかどうか。すなわち、いろいろな評価書を読んでおきますと、かなりの方が年俸制をしいておられると思うのですが、同時に年金制度の問題も指摘されていたと思うのです。したがって、人事制度との絡みとして、研究のパフォーマンスが非常にうまくモデル的に作用しているということであれば、そういう評価をしてもいいのではないかと個人的に思いました。

以上、2点です。

○相澤座長 2点、御指摘がありました。一つ目の学生の就職ということで、山本委員の意向としては、地元の大学・研究機関、あるいは企業、そういうところにもっと就職が伸びてもいいのではないかという意図でございましょうか。

○山本委員 そういうことではなくて、沖縄振興に寄与していただけることが、少なくとも10年ぐらいのオーダーでは必要ではないのかということです。

○相澤座長 先ほどOIST出身者の就職のことを指摘されましたが、そこの関連ということでしょうか。

○山本委員 それも含まれます。

○相澤座長 分かりました。

ここについては、まだデータも十分に整理されておりませんので、今後の検討とさせていただきます。

もう一点、人事のことについて出てまいりましたけれども、今回、この「2. 教育研究」のところでは、先ほど御指摘のようなところは、ここでは触れておりませんが、後の部分のところに、ここに関わることは出てくると思いますが、このところで、むしろ山本委員が先ほど最後のほうにおっしゃった、この研究成果のすばらしい状況というのが、人事の制度と関連しているのではないか。そうであれば、それをもっと浮き彫りにしたほうが良いという理解でよろしいでしょうか。

○山本委員 そういうことです。

○相澤座長 それでは、そこはまだ十分に整理されておりませんので、今後の検討とさせていただきます。

瀧澤委員、どうぞ。

○瀧澤委員 瀧澤です。どうもありがとうございます。

5 ページ目の教育のところの一番下の1 段落なのですが、事務局の方に「琉球大学や沖縄高専といった県内の教育機関との教育研究以外の取組も含めたコラボレーションを」と書き加えていただいているのです。これはもうちょっと具体的に何を言いたいのかということを書いておかないと分からないと思うのです。事務局の方にお伺いしたいと思っておりますが、お願いします。

○相澤座長 いかがでしょうか。沖縄振興とか、地元のところに少し出てくるのですが、事務局からお願いできますか。

○中島次長 事務局から少し補足をさせていただきます。

教育研究以外というところなのですが、これまでOISTでもいろいろ取り組まれてきていると思うのですが、検討会の議論の中で出てきた話としては、レクリエーションとか、そういったものの施設の供用とかも含めて、交流を含めていったらいいのではないかという文脈で出てまいりましたので、このような形で入れさせていただいております。

○相澤座長 あと、補足資料の資料3-2の最後のほうに、スライドの番号では25番です。

「ここに地域に開かれた大学をめざして」という写真が六つ入っているところがあります。今、御指摘のところの一つの例ではないかと思えます。ですから、こういうことをもう少し分かりやすく、先ほどの教育以外の地元とのコラボレーション、それを明記すると、はっきりするのではないかと思えますが、そういうことでよろしいでしょうか。

○瀧澤委員 今、見せていただいて、地元の人たちとの交流とか、アウトリーチということだったと思えますけれども、ほかにも何かもしることがあれば、加えてもいいかもしれません。今のところ、その二つは、具体的に書いておいたほうが良いのではないかと思います。

○相澤座長 この点についても、さらに具体的な例を求めていく場合に、サイトビジット

をして、地元の方々の御意見を伺うということが有効ではないかと思ひます。今の御指摘の点を反映できるようにしたいと思ひます。

それでは、そのほかいかがでしょうか。

○グルース学長 ジョナサン・レイがコメントしたいようです。その後私からコメントさせていただきたいと思ひます。

○相澤座長 ジョナサン・レイ副学長、よろしくお願ひします。

○レイ副学長 ジョナサン・レイ広報担当副学長です。

手短かに事務局の方に御参考になるかどうかということで、国際交流プログラムを地元提供しております。

そして、起業家プログラムも特に沖縄の若い人たちに向けても、提供しております。キャンパス内でアントレプレナーシップを育てていこうということで、取り組んでおります。

中心となる研究だけではなく、社会的、環境に関わる研究なども行っておりますし、より広い地元、コミュニティー、沖縄に対して、取組を行っております。

以上です。

○グルース学長 私からも追加させていただきたいと思ひます。

補足資料を見ていただきますと、25ページ以降なのですが、昨年の広報活動、メディア報道について書いてあります。地元のメディア、そして、沖縄県民に対しての広報が非常に成功したということが、このページから分かると思ひます。

別の点ですが、資料3-1の9ページなのですが、評価のところ。「これまでの学際的な研究を通じて明らかになった新たな研究領域を示していくことが期待される」とありますけれども、外部からのエキスパートを呼んで、例えばマックスプランクやノーベル賞受賞者なども呼んで、どの分野がOISTは先端研究をやっているのかという評価をしていただきました。日本において、サイバーセキュリティーといったことが必要だろうとおっしゃってございました。

資料にはありませんけれども、5年ごとに外部からのエキスパートの評価委員会を呼びまして、OISTの教員とともにディスカッションをしてもらって、今後4年、5年でどういった研究分野をやっていくべきかということディスカッションしております。これは非常に重要なことだと思ひます。トップダウンだけではなく、ボトムアップも可能にしているプロセスだと思ひます。ボトムアップというのは、教員たちからの声を聞くということです。

山本さんのコメントについてですが、地元沖縄県やビジネス界との交流ですが、OISTは、県、地元企業と合わせて43のプロジェクトを昨年行いました。現在、科学技術ワーキンググループを沖縄県とともに、沖縄の10年振興計画ということで、共に取組を行っております。ですので、沖縄の産業界、そして、沖縄県とともに取組を進めているということをお承知おきいただきたいと思ひます。

○相澤座長 ありがとうございます。

ただいま説明いただいた点は、検討会としても最大の関心事であります。エクスターナルパネルからいろいろとサジェスションが出てまいりましたが、それをOISTがどう実現していくのか、そこに大きな関心を払っておりますので、今後の課題として、ただいまのようなことを挙げているのは、まさしくそのところであります。

それでは、そのほかにいかがでしょうか。お名前をどうぞ。

○大島委員 東京大学の大島です。

○相澤座長 大島委員、どうぞ。

○大島委員 重なることと、もしかして、先ほどの御説明にされたこととも関係すると思うのですけれども、教育の観点と研究と一つずつございます。

教育に関しては、評価の5ページの例えばセカンドパラグラフにあります「ラボローテーション等独自性のあるプログラムを編成するなど創造性や独自性に富んだ」ということが書いてあるのです。きちんと選抜した比較的優秀な学生ですね。それをよりポストクの質の高さということで、世界的に高い質までに高めるという評価に至るまで教育しているということをごここでは言いたいことだと思うのですけれども、ここで何をもち「創造性」と言っているのか、ここで「独自性に富んだ研究」と言っているのは何を言っているのかということ、もう少し具体的に書いていただくと、より優秀な学生を教育しているということが具体的になるのではないかと考えておりますので、紙面に限りがあるのかもしれないのですけれども、ワーディングだけではなくて、もう少し実質的な特徴を端的にまとめていただけるとありがたいと思っています。

2点目の研究です。これについても同じ御指摘になると思います。もともと非常にポテンシャルの高い教員を雇っています。その教員がいわゆるNature Indexの機関に対して、そういうランキングにも高い研究成果を出せるということなのですから、もともとポテンシャルが高いから、こういうことができるのか、OISTに来たからこそ、そういうポテンシャルがさらに花開いて、こういう成果を上げたかということだと思うのです。なので、ここも特に「他の海外の有力研究大学・機関に倣った国内では独自性の高い取組」と書いてありますので、これは何が海外の特徴であって、日本にはない取組としては何を言っているのかということをもうちょっと明確にさせていただくと、先ほどの1番目のモデルケースと言っていたものを、さらに具体的なことに関しても言えると思いますので、ぜひ端的にまとめていただけるとありがたいと思います。

以上です。

○相澤座長 ただいまの意見は、これまでOIST側からは何度も非常に明解なメッセージをいただいております。それらに基づいて評価をしているという立場ですので、今、大島委員の御指摘の点は、そこにエビデンスの具体性があるもの、幾つかは既に入っているのですけれども、それを加えて、具体的に強調したいと思います。

○大島委員 そうしていただけますか。何回も言っていることは分かっているのですけれども、評価として文章に残るのであれば、それはある程度きちんと端的にまとめていただ

かないと、評価としては少し欠けるのではないかと考えています。

○相澤座長 それでは、ただいまの点にOIST側から特段の発言があれば、いかがでしょうか。これまでは何度も指摘していただいているので、私どもとしては、把握はしているつもりでございます。よろしいでしょうか。

それでは、そのほかの点に移りたいと思いますが、いかがでしょうか。瀧澤委員、どうぞ。

○瀧澤委員 瀧澤です。

教育のところの確認した事項のところ、過去の検討会でも既に確認したことで、私が忘れてしまっているだけかもしれないのですが、「①学生の獲得」のところなのですが、例えば第8期生がいいと思うのですが、合格者が79人いるにもかかわらず、実際に入学した人が52名ということで、ほかの年も入学辞退者が結構多いという印象なのですが、それはどういう理由だったのかということをお聞きできなくて、それは高評価につながるのか、あるいはOISTが抱えている何かの課題なのかをどなたか教えていただきたいと思うのですが、ぶり返してしまうような議論で申し訳ありません。

○相澤座長 それでは、OISTから説明をお願いします。

○グルース学長 御説明させていただきます。

学生ですけれども、これについてスクリーニングをするわけですが、非常に高い質を持った学生たちですけれども、非常に魅力のある学生たちです。その学生たちは、ほかの大学に行くオプションもちろんあるわけですが、多くの学生はOISTに行かないで、ほかの大学に行くということは、そういった理由ですけれども、前回のアドミッション・ワークショップにおいては、非常に質の高い学生たちにたくさんオファーしたわけですが、このときは100%入学しました。誰もOISTを選ばなかったという学生はいませんでした。

もちろん新型コロナウイルスの状況があります。時間的な問題がありますけれども、そのうち66人のうち20人がうまく入国できて、OISTに入学できたのですけれども、46名はこれからということになります。ですので、オンラインの教育をしていくということも行っていきます。海外の留学生は渡航の問題がありますので、秋の途中に入国するということになるかもしれません。世界中のトップの学生たちがたくさんのオプションを持っているということです。

前回のワークショップに関しては、100%が入学希望だったということです。

○相澤座長 よろしいでしょうか。

○瀧澤委員 ありがとうございます。

そうしましたら、総合的に考えると、沖縄という立地条件が少し障害になっている可能性があって、COVIDの影響でオンラインの比率が高くなると、入りやすくなっているという理解をされているということでしょうか。

○相澤座長 OISTからいかがでしょうか。

○山本研究担当ディーン 山本です。

これは一例になるかもしれませんが。

○相澤座長 山本委員、ちょっとお待ちください。今、OIST側に答えを求めています。

○山本研究担当ディーン 私はOISTの山本です。

○相澤座長 失礼しました。それでは、どうぞ。

○山本研究担当ディーン 一例になるのかもしれませんが、例えば先ほどグルース先生が言われたように、OISTに合格して、かつ例えばハーバード大学に合格しているという学生がいたわけです。そういうときになぜ向こうを選んだか。

私が知っている例では、向こうに行くと、同じ研究分野の教員がたくさんいるのです。OISTに来ると、1名しかいない。その1名には非常に魅力はあるのだけれども、その学生は真剣に考えて、もっとオプションの多いところに行きたいと考えた例があります。

もしOISTが発展して、教員が増えてくれば、高いレベルの学生がもっとOISTに来るのではないかということを感じました。一例ですけれども、そういうことがありました。

○瀧澤委員 よく分かりました。ありがとうございます。

例えば入学辞退率を同レベルのほかの世界の大学と比べて、分かるものかどうかは分かりませんが、比較するという事は、これから予定はされていますでしょうか。

○相澤座長 OIST、その辺りの答えはいかがでしょうか。

○スコグランド研究科長 スコグランド研究科長から、もう一度コメントします。

比較ができないと思いますけれども、そこで意味を見いだすことは難しいと思います。何人がハーバードに行っているということです。ハーバードには学部生も含まれています。OISTに関しては、博士号だけです。数が全く違います。学部生はもちろんOISTにはいないわけです。ですので、数がかなり少なくなります。

例えば米国ですけれども、多くの学生たちがトップの大学院大学に博士課程を取りに行くわけですけれども、オンラインでの申請システムがあって、50もしくは50以上の大学院に1回で申し込むことができるシステムがあります。そして、オファーをもらえる大学の中からベストを選ぶというシステムがあります。

一人、リサーチインターンで米国から来た学生がいたわけですけれども、そして、米国のメインランドに戻ったわけですが、数十の大学院大学に申請をして、6校からオファーを得た。ですので、日本と海外では状況が違っていると思います。なので、それを踏まえて比較をするのは、非常に難しいと考えるわけです。

○瀧澤委員 分かりました。どうもありがとうございます。少し脇道にずれてしまいました、すみませんでした。

○相澤座長 それでは、ただいまの教育と研究については、以上とさせていただきます。

次の「3. 沖縄の振興及び自立的発展への貢献」であります。

それでは、説明をお願いいたします。

○中島次長 事務局でございます。

それでは、まず教育研究の部分から御説明をいたしますと、評価でございますが、9ペ

ージの上のほうを御覧ください。オニヒトデのゲノム解析や再生可能エネルギー開発など、世界最高水準の研究を実施し、世界的にも高い評価を得ながら、沖縄が抱える課題の解決に向けた検討を、沖縄の特性、資源を生かしつつ推進していると評価できるとしております。

一方ですけれども、財源の話に触れつつ、前回、沖縄の地の利を生かした研究をという御意見がございましたので、そうした趣旨のことを追加しております。

また、OISTが沖縄振興にどのような形で貢献できるかについても、OISTの研究成果と県や市町村の計画とをひもづけてはどうかという御意見を前回いただいておりましたので、その部分につきまして、県や市町村が抱える課題を明確化し、連携して各課題とOISTの研究を連携させるような取組の進展が期待されることとしております。

続きまして、産学連携の部分でございますけれども、確認した事項について、データと補足の加筆を行っております。

評価につきましては、10ページ中ごろを御覧ください。共同研究件数ですとか、受託研究件数が増加傾向にあるということや、OIST発ベンチャーの創出、POCプログラム等の取組を通じましても、イノベーション・エコシステムの形成に向けて、研究成果の活用が促進されていると評価できるとしております。

一方以下なのですけれども、前回の御議論を踏まえまして、独自性のある技術をベースに具体的な取組が必要であるが、OISTにおける産学連携の基盤となる技術や産業化に向けた今後の具体的な戦略が明らかでない点が課題であるとしつつ、今後、イノベーション・エコシステム構築に向けた県内の体制強化に向けた取組が期待されることとしております。

続いて、地域交流等の部分でございます。11ページに評価を書いております。科学講演会、学生を対象とする訪問プログラムの開催など、科学啓蒙・交流活動を積極的に実施していると評価できるとしております。

今後としては、OISTの教育研究を沖縄県の教育や科学技術の発展にどのような形でつなげていくのか、県との連携を深めることが必要としております。

以上です。

○相澤座長 それでは、この項目の中には、大きく分けて三つのカテゴリーが入っておりますが、全体を見ながら御意見をいただければと思います。

岡崎委員、どうぞ。

○岡崎委員 岡崎です。

2点ございます。

教育研究の評価の部分なのですけれども、後段の部分なのですが、OISTと沖縄県の関係の方々がお互いによく理解するという意味で、定期的にミーティングの場を持ったかどうか。それをトップレベルと事務レベルで持たれると、お互いのやっていることがよく理解できて、交流が進んでいくのではないかと思います。

そういう意味で、もし修文できるのであれば、評価のところの下から2行目の「連携し



て各課題」の前に、例えば「定期的に会議を持つなど」と入れていただくと、明確になるというのが一つです。

二つ目は、産学連携で、10ページの評価のところなのですが、これはコメントなのですが、OISTの研究成果を事業化に至らせるためのいろいろな支援メニューがあると思うのですが、例えば研究成果のうち、POCに採択をして、さらにブラッシュアップをしていく。そこから事業化になるものについては、スタートアップアクセラレータープログラムでさらなる支援をしていく。さらに研究成果をサポートするために、外部資金調達の支援もなさっておられる。それ以外に、例えばベンチャーキャピタルへのつなぎであるとか、あるいは各ベンチャーとの連携であるとか、OIST側で研究成果を事業化に至らせるためのプログラムがあると思います。言うなれば一気通貫で御支援なさっているプログラムを体系的に1枚の図でまとめていただくと、外部から見るともこういったトータルのサポートをしておられる、あるいは中の研究者の方も、御存じかもしれませんが、OISTがトータルのサポートをしているということの理解が得られやすいというのが一つ思ったことです。

以上でございます。

○相澤座長 それでは、第1点ですが、ただいまの御指摘は、極めて適切だと思いますので、評価のところ「定期的な会合を持つなど」という表現を挿入することで、修正させていただきたいと思います。

それから、第2点であります。ただいまの御指摘は、今までOISTからいろいろと説明があるときに、その全体像を分かりやすいシステムとしての図にするというところが、まだ見えていなかったように思います。この点については、OISTから御発言いただけますでしょうか。

○グルース学長 ロバート・バックマンがスカイプで参加をしておりますけれども、私のほうでもアイデアがあります。地元産業界との継続的な会議をやっていくというアイデアもありますけれども、既に行っています。ですので、全く新しい考えではありません。年に数回、沖縄経済同友会とも会議を持っておりますし、沖縄の産業界との接点を増やしたいという意味で、沖縄の経済同友会の代表幹事を評議員会の評議員に就任いただくよう、お願いをしているわけです。ですので、沖縄の産業界の方がOISTの評議員会のメンバーになっていく、そういったことで、さらにここを強化していきたいと思っております。

また、図にするということですが、今、走っている様々なプログラムを図にするということで、理解いたしました。

○相澤座長 今、学長が示されたアイデアですが、そのデータを提出していただけるという理解でよろしいでしょうか。

○グルース学長 もちろんでございます。

○相澤座長 ありがとうございます。よろしく願いいたします。

それでは、そのほかの御意見はございますか。西澤委員、どうぞ。

○西澤委員 後の財務のところとも関わるのですが、10ページのところに、共同研究費で外部資金の記載がございます。これは2015年から2019年までの4年間ですが、14億円、年間3.5億になるのですけれども、この金額は、恐らく皆さんが予定している金額を超えるような、かなり大きな金額になっていると思います。いつも言っているのですけれども、共同研究の相手として、基本的にOISTはベンチャーとか、そちらばかり強調しているようなのですが、これは一体どういうところから共同研究を受けているのか。

恐らく産学連携の一つのポイントとしては、既存の企業、全世界の優れた研究開発等に関心を持つような企業とどうやって大学が共同研究等々をしながら、外部資金を導入するのかというのは、非常に大きなポイントだと思います。ここにおいて14億という、かなり大きな金額が出ているわけで、この具体的な中身と分野、さらにこれをどう戦略的に拡大していくのかという、ベンチャーとはもう一つ違う側面の戦略みたいなものについて、OISTはどうお考えになっているのか、伺いたいと思います。

○相澤座長 それでは、OISTから御発言をお願いいたします。

○グルース学長 コメントを二つに分けたいと思います。先にロバート・バックマンから既存の共同研究についてコメントをしてもらって、そして、私からはベンチャーキャピタルに関して、将来に向けてのベンチャーキャピタルファンドについて、御説明をさせていただきたいと思います。

○バックマン首席副学長 現在は、幾つか共同研究の合意、ライセンスがありますけれども、リストを提供することができます。活動の幅はかなり広いものです。生物学ベースの共同プロジェクト、例えばOIST米ですとか、今ですと、マーケットアビリティというものを調べています。そして、太陽光発電、様々な物理化学といったものもありますので、幅は広いわけです。

そして、共同研究の一部は、中小企業ともやっておりますし、国際的な企業ともやっております。大企業ともやっております。かなり長期的に日立とは共同研究を進めています。幾つかのプロジェクトを日立と進めていこうということで、今、やっております。幅広い内容について、リストを提供したいと思います。

また、ファンディングですけれども、こういった活動を県が資金提供して、支援をしてくれているものもあります。コーポレート企業からの資金もあります。

私からは、本日は以上です。

○グルース学長 二つ目の点について、お話をさせていただきます。沖縄においてベンチャーキャピタルを発展させていく、特にハイテクスタートアップに対してのということです。

これまで財務界からOISTに訪問していただいたことが何度かあったわけですが、OISTの目標、そして、これまでの実績に非常に感銘を受けていただきました。そして、その一部の方々からは、OISTの支援というわけではなく、スタートアップを支援するという話になって、5000万ドルの支援をするという話になっています。

どのようにその資金を使っていくのかということを確認していかなければいけません。OISTが扱うのではなく、OISTの知的財産ということだけでなく、世界中からこういったプロジェクトを持った人たちを呼び込んで、このプロジェクトの中でトップのプロジェクトを選んで、スタートアップ文化をOISTでつくっていくということです。トップのクリエイティブな考え、アイデアを世界中から集めて、OISTの隣で育成していく、広げていくことを目標にしています。

沖縄県からは、五つのプロジェクトで資金を提供していただいております。POCプロジェクトということで、五つのスタートアップが沖縄県から資金提供を受けています。全く同じ戦略を使って、アイデアを公募して、そして、資金を提供して、それに対して200の申請があり、その中から選んで、スタートアッププログラムということで、沖縄県からの資金提供を受けて育てていっているわけです。OISTのIPを育てるとともに、OISTは知的センターであり、世界中から人を呼び込んで、アントレプレナーシップを打ち立てていく。ベンチャーキャピタルファンドを通して、こういった新しいスタートアップの資金提供をしていくことを考えております。

○相澤座長 ありがとうございます。

それでは、ただいまの2点について、データとして提示していただけるとのことですので、よろしくお願いします。

それから、先ほど来、小柴委員から手が挙がっております。小柴委員、どうぞ。

○小柴委員 ありがとうございます。小柴です。

資料3-2に博士課程修了生の進路があって、現在の修了者数は35名とあるのですが、この前の西澤先生にも質問にも関係があると思うのですが、進路先に日本の企業がない。日本の国研も一つ理研があるだけです。今、企業というのは、Ph. D. を持っている方の就職は結構活発になっているのです。その中で、日本の企業とか、日本の国研に進まないことの原因はということなのか。

我々は非常に幅広く産学連携をやっています。普通の企業に比べると、かなり踏み込んだ産学連携をやっているのですけれども、自分たちでやってみての印象は、企業が何を求めている、また、博士課程の方々が企業で活躍するイメージがつかめないとか、例えば企業に行って、日本語ができないというのが一つの壁になってしまうとか、今、我々は、日本語をしゃべることができない人が入れば、社内はほとんど英語での会話になっているのですけれども、日本の企業とか、日本の国研に進路を選ばれないのは、どんな理由があるのか、現場の先生方の御意見を伺えればと思いました。

○相澤座長 OIST側からレスポンスをお願いします。

○グルース学長 日本人の学生は、日本の企業に行きます。ただ、OISTでは数が少ないわけですね。これまで2期生までしか卒業しておりませんので、数自体が少ないということもあります。

気づきましたのは、大学院生に対して、日本企業での就職に関しての情報が少な過ぎる

ということです。こういった理由で、日立とも共同でワークショップを行っております。教員、研究者、スタッフが東京の日立を訪問しまして、Ph. D. を持った新卒生が日立でどういったことができるのかという話をさせていただきました。そこで情報を得ました。これまで情報がなかったということです。ですので、こういった情報を日本企業からOISTの学生に渡さなければいけないと思います。

経団連や経済同友会とも東京で会議をさせていただいて、日本の大企業から広報担当の方を年に1回OISTに送っていただいて、特定の時期というわけではないですけれども、年に1回呼びして、日本企業で働くことの利点をOISTの博士課程の学生たちに対してプレゼンしていただくということを考えております。

○小柴委員 分かりました。

私、同友会で、今、副代表幹事をやっていますので、よく伝えておきます。

ありがとうございます。

○西澤委員 西澤ですけれども、一つコメントさせていただいてよろしいでしょうか。

○相澤座長 ちょっとお待ちください。

ただいま小柴委員が指摘されたことは、OISTだけの問題ではありません。日本の大学の博士課程の就職先については、長い間の大きな問題とも関連しております。そういったことで、OISTが新しい大学の下で、非常に幅広いPh. D. を育ててきていることが、日本の企業にとってもうまくマッチすることになると、これは大変いいモデルになるのではないかと思いますので、ぜひ経済同友会としても、こういうところでのインタラクションを強めていただいて、相互に発展できるような形を取っていただければと思います。

○小柴委員 分かりました。

○相澤座長 西澤委員、どうぞ。

○西澤委員 今の小柴委員のこと、また、相澤座長のコメントにも関わるのですけれども、そういうことも含めて、具体的に産学連携を専門にやる場所というか、研究が必要だろうと思っています。

十分に成功しているとは言えないのですけれども、例えば私が属しているNICHe、東北大学未来科学技術共同研究センターは、20年ぐらいたつのですが、企業からの共同研究、受託研究を中心に、20億ぐらいで外部資金だけで動かして、ポスドクの人とか、そういう人たちが共同研究の現場に入っています。なので、いわゆるアカデミアに行くのではない違うキャリア、実際に企業の人たちと一緒にやすることで、企業側もこちら側の強い能力が分かりますし、また、学生も実際に企業ではこんなことをやっているのかということが分かる。恐らくそういう場をつくることが本当は必要で、広報とか何とかでやるのではなくて、もっと具体的に日本の大企業とか、研究の第一線の人たちが、OISTの研究テーマを見て、これは面白いと言って積極的に出てくる。OISTで共同研究をすることによって、そこにポスドクの人が入っていくことを通じて、恐らく非常に大きな産学連携の効果が出てくるのだろうと考えています。

そういう意味で、ベンチャーというのも非常に重要なのですけれども、もう一つは、日本または世界の大企業と組めるような研究成果、または具体的な産学連携の場、そういうものをきちっとつくって、そこできちっとした外部資金を獲得していくことが、今後のOISTにとって非常に重要なのではないかと考えています。

以上です。

○相澤座長 ただいま御指摘の点は、中間取りまとめの後の進め方の大きな課題だと思いますので、そこで進めさせていただきます。

それでは、次の評価項目に移らせていただきます。「4. 広報、情報公開、その他法令遵守等」であります。

それでは、まず事務局から説明をお願いいたします。

○中島次長 事務局でございます。

資料3-1の11ページから「4. 広報、情報公開、その他法令遵守等」でございます。

広報ですが、確認した事項については、少し言葉を足したり、データを追加したりしております。

評価につきましては、12ページの中ごろを御覧ください。プレスリリース等の取組は増加傾向にあって、SNSを通じた発信等も積極的に展開をしている。OISTの活動について、適時適切に情報提供をしていると評価できるとしております。

また、前回、SDGsに取り組んだらいいのではないかとか、また、研究コンテンツを教育に活用することで、広報につなげるというやり方もあるという御意見をいただきましたので、そうした趣旨のことを次のパラグラフに盛り込んでおります。

また、沖縄県民に対して、OISTが沖縄振興に貢献していることをより認識してもらえるような広報の在り方を検討することも必要と考えられるとしております。

続いて、情報公開、その他法令遵守等でございます。

前回の御意見を踏まえ、確認した事項のところでございますけれども、13ページの四つ目のポツで、リスクマネジメントの中身を少し書き下すような形としております。

評価はその下にございますけれども、ここはきちんとやるべきことをやっているということで、業務運営における透明性を確保していると評価できる。公の法人として、求められる義務や責任を果たしていると評価できるとしております。

以上です。

○相澤座長 ただいまのところは、これまで検討してきたところにも関連して、既に議論も出ているところでありますが、改めてこういうくくりでくくってみると、評価として、今まとめられたみたいになります。ここの辺りは、今後、現地でのヒアリング、その他も行われますので、さらにこの辺りは深めていく部分だと思われれます。

それでは、御意見等いかかでしょうか。長我部委員、どうぞ。

○長我部委員 長我部です。

広報の評価の視点なのですからけれども、広報の目的とひもづけて、どのような手段で行わ

れて、どのような結果を生んだかというところをよく見ていくといいと思うのですが、今の評価は、地元の理解という面では、そのために何をやるべきか、やってきたかという視点があるのですが、例えば先ほどの産学連携のために、企業に活動成果を伝えるための広報であるとか、あるいは世界中の学生をアトラクティブに引きつけるための広報であるとか、やはり広報の目的と手段をひもづけて、成果がどうだったという視点を強く持つといいのではないかと思います。

以上です。

○相澤座長 ありがとうございます。

大変重要な御指摘で、目的別に整理すると明快になるということでもあります。表現上、整理ができるかどうか、今後、検討させていただきたいと思います。

そのほか、いかがでしょうか。大島委員、どうぞ。

○大島委員 大島です。

評価という観点で、先ほどの御指摘と似た指摘なのですが、今回は沖縄を中心ということだったと思うのですが、広報という観点であれば、OISTは非常にダイバーシティーが高く、あとグローバルな観点を持っていますので、もう少しグローバル観点での広報的なこと、しかも、言語は英語でございますので、そういう点では非常に有利でありますので、そういうグローバル展開を含めた広報戦略みたいなものも今後強めていただけると、さらにOISTの良さが分かるのではないかと思いますので、ぜひ御検討いただけたらと思います。

○相澤座長 この点につきましては、OIST側からどなたか対応していただけますでしょうか。

○レイ副学長 広報担当のレイ副学長から回答させていただきます。

この問題は、直接的に関わることだと思いますけれども、広報担当のスペシャリストを採用いたしました。これまで日産の広報で働いていた日本人ですけれども、メディア、広報という点で、非常に強化していけると思います。

私もオックスフォード大学で広報担当をしておりましたけれども、オーディエンス、目的に合わせて広報をつくっていくということです。

特に英語がOISTの公用語ですので、こういったところも強みということです。

沖縄県に関しましては、沖縄県とともに、地元メディアとの連携を強化していきます。

○相澤座長 オーディエンスに合わせてという中で、先ほどの指摘は、グローバルなビューポイントをもっと明確にしたほうがいいのではないかと指摘だったのですが、その点についてはどうでしょうか。

○○○ グローバルな広報ということで、数多くの研究、特に新型コロナ関係の研究ということで、ここ数カ月は出ておりました。『ネイチャー』などでも発表をされておりますが、これはBBCやCNNなどでも報道されています。これは非常にOISTにとって重要であると思います。日本がグローバルな科学のリーダーであるということを示しているという点で

重要だと思います。

日本向け、グローバル向けということで、分けて広報戦略を立てています。二つのことを同時にやっていきます。地元である沖縄に対してやっていくことですが、沖縄は非常に重要であります。そして、日本のメディアに対しての戦略をやっていくということ、同時に国際的なジャーナリストとも協力関係を強めていくということです。

例えばマリンサイエンスに関しても、東京、ロンドンなどのメディアとも関係を構築しながら進めているものもあります。

地元のメディアたちにもOISTの研究者たちと話をしてもらい、地元のメディア、グローバルなプロモーションのバランスを取っていくことをやっています。

○相澤座長 ありがとうございます。

それでは、そのほかの御意見はいかがでしょう。宮浦委員、どうぞ。

○宮浦委員 広報に関しまして、ウェブサイトの運営言語は英語だと思うのですが、将来的に多言語にしていくほうがいいと思っているのですが、例えばドイツの大学ですと、ドイツ語と英語で多言語ですし、世界各国の言語を考えると、アジアから始めて、日本語もそうなのですが、中国語ですとか、あるいはフランス語ですとか、英語が基本でいいと思うのですが、広報については多言語にするのは、さほど労力は要らないと思いますので、多言語で運用されるのもいいと思いました。

もう一点、産学連携に戻って恐縮なのですが、語尾の最後で、県内との連携強化ということ産学連携でもうたっけいらっけしたのですが、産学連携はグローバルな視点で、もちろん県内の連携も重要なのですが、国際的なファンドを見据えて、国際連携の強化を特に産学連携ではうたっけおいたほうがいいと思いました。先ほど言い忘れたので、申し上げておきます。

広報については、今、ほとんど皆さん情報をウェブサイトで見られているので、複数の多言語形式にするのも一つの方法ではないかと思います。

産学連携の面でも、アクセス数が飛躍的に増大する可能性があるのではないかと思いますし、学生を集める意味でも、英語が基本でいいのですが、日本でも本土で多言語で対応している大学もありますので、それも検討して、今後、検討課題にさせていただけるのではないかと思います。

以上です。

○相澤座長 ただいまのウェブの言語について、OISTからコメントはありますか。

○レイ副学長 ジョナサン・レイから説明いたします。

OISTのウェブサイトは、全てのページにおいて、英語と日本語、両言語で示しております。

そのほかの言語もということですが、グローバルニュースを出したときは、フランス語、イタリア語などで報道されます。多くの教員の母国語は、フランス語やほかの言語です。

マリンサイエンスにおいても、最近、英語でのインタビューを受けましたけれども、母国語はフランス語です。中国語やフランス語、スペイン語、こういったことも検討しているかと思います。新しいテクノロジーを使えば、そんなに労力をかけなくても可能だと思います。

○相澤座長 産学連携についての地元のことと国際的なことは、むしろこの検討会の今後の課題だと思いますので、そのような取扱いにさせていただきます。

それでは、そのほかの御意見はいかがでしょうか。

特段ございませんようですので、評価項目「5. 財務」に移らせていただきます。

それでは、まず事務局から評価の部分を中心に説明をお願いします。

○中島次長 事務局でございます。

13ページを御覧ください。予算執行の有効性、効率性、適切性でございます。

評価については、14ページに書かれております。予算執行状況の月次のモニタリングや年度内再配分の仕組みの構築により、適切な予算執行の実現に取り組んでいると評価できる。また、不正防止及び不適切な執行等への対応に適切に取り組んでいると評価できるとしております。

他方、予算の効率化についての説明は十分でなく、今後、限られた予算の中で最大の研究成果を上げるために、運営の効率化を図る必要があるとしております。

続いて、自立的財政基盤の構築でございます。

確認した事項のところに、外部資金の獲得のためにOISTがこれまで行ってきた取組について、加筆をしております。

14ページの最後のポツのところですが、外部資金獲得額のデータについても加筆をしております。

評価については、15ページを御覧ください。自立的財政基盤を評価するため、助成金申請のためのサポートやインセンティブの導入、共同研究の促進やOIST財団の設立などの取組を通じ、外部資金獲得額は増加傾向にあり、自己収入の安定的な確保や財政基盤の強化に向けた取組に一定の成果は上がっていると評価できるとしております。

今後は自立的財政基盤のさらなる強化に向け、OISTの掲げる外部資金獲得目標達成のための一層の取組が必要であるとしております。

以上です。

○相澤座長 それでは、いかがでしょうか。山本委員、どうぞ。

○山本委員 山本です。

1点だけです。現地での確認でもいいと思うのですが、外部資金を増やす場合、資料にもありますように、間接経費の持ち出しが結構多くなっているというお話がありますので、これは逆に言えば、ハイトラストファンディングだから、間接経費が十分に確保できたのかもしれないという問題と絡み合ってきます。これは日本全体の問題でもありますので、現地でまた確認させていただきたいと思います。



以上です。

○相澤座長 それでは、そのほか、いかがでしょうか。西澤委員、どうぞ。

○西澤委員 西澤でございます。

自立的財政基盤の強化に向けてということで、幾つか資料を頂いているのですが、例えば資料3-2の補足資料の一番最後に外部資金についての区分けがされています。もう一つの机上配付資料とは、区分がちょっとずつ違っているのですけれども、一応ここには科研費から寄附金まで6項目が並んでおりまして、これがどうなるか。トータルで10%という評価になっているのですけれども、この中で非常に気になるのは、産学連携系と学術系を分けているのはいいのですが、両方が一緒になっているようなところがあったりするわけです。

例えばその他国内助成金というものがあるのですけれども、基本的に産学連携系というのは、いわゆるサードミッションをやる部分と、ピュアに研究教育等々をやる部分は分けるべきではないかと思っています。

私はずっと日本の大学で苦勞してきたのですけれども、産学連携系は基本的に外部資金で賄うということです。もちろん大反対が起きますけれども、それは絶対的に必要なことだろうと思っています。ここには載っていないのですけれども、それをもって初めて技術移転からのロイヤルティー収入とか、そういうもので、一体産学連携でどれだけきちっと収益を上げているのか、それがもし上がっていないとすれば、なぜなのかということを経営的に分析することが可能になってくると思います。

それから、先ほども出ましたけれども、外部資金できちんとやっていたら、産学連携の分野で、例えば共同研究、受託研究をやって、ポスドクの人たちを雇用者として対応することも可能になってきます。それは非常に大きな効果を大学院生、ドクターコースの人たちに与えることとなりますので、ぜひここは分けてどうするかということをごきちんとお考えいただきたいと思っています。

ただし、そのときに、科研費とか、そういうものは、実は産学連携系にも、今、入ってくる側面がありますので、単純に項目だけではなくて、具体的にどうテーマとして設定されているかを踏まえた上で、やはり産学連携系は産学連携系としてきちんと分けて、それは基本的に外部資金依存にして、そこでそれを達成するために一体どういう条件が必要なのかということを経営的に考えていく、これが新しい大学の財務戦略として、非常に大きいことではないかと考えております。

以上です。

○相澤座長 ただいまの御指摘は、ここで大きな目的としている外部資金を獲得するというのと、同時に外部資金の中身がどうであるかという問題でして、このところは必ずしも同一に扱えないところがあるかと思っています。

この検討会の大きなポイントは、国費として、OISTのためだけに投資されているものを本体の予算とすれば、それ以外をここでは外部資金と位置づけるような考え方で進めてき

ているわけです。産学連携に使われるとか、中身のところまでは、次の段階のステップだと思えます。

西澤委員の御意見は、初めから使途を意図した形で外部資金をここで調達すべきだとか、そういうお考えだと思うのですが、前提として、外部資金の取扱いの考え方なのですが、西澤委員は、今、私が説明していることに対して、どうお考えでしょうか。

○西澤委員 そのところは、最後にいろんな指標を見せてもらって、今後、外部資金をどう増やしていくのかということを読んでいると、非常に分かりにくくなるのです。

例えば机上配付資料2の後ろに原則とか、戦略ということが書いてあって、トータルPI数をベースとした予算というものがある、これは自動的に増えていきます。それに対して、外部資金というものがあって、今、挙げた1～6までをどういうふうにするかで、10%になるということを経済目的にして、2035年としているのです。

これだけを見ると、いわゆる国費が投入されている部分と外部資金は、ベースラインというものがむしろ国費そのもので、それを補完するというのか、そういうものとして外部資金が取られているように思うのです。

そうだとすると、中身の問題はちゃんと議論しておかないといけないのではないかと気がして、今のような問題提起をさせていただいたということです。

○相澤座長 確かに今の御指摘の点は、ある意味では曖昧にならざるを得ないという構図になっているわけだと思えます。

原則は補足資料の財務のところから、ページ数が30ページになるのでしょうか。「OIST関係予算の推移/Trend of OIST Budget」というところです。これがここで言っている国費という根拠です。国立大学法人で言えば、運営費交付金です。その部分なのです。

ここに対して、上積みとして資金が外部から、科研費は考えれば国費です。そうではあるけれども、そういうような沖縄のOISTに対してだけに投じられる運営費交付金に相当する部分以外のものを外部資金と呼んで、そのところだけ膨らませていって、自立の方向性を示すようにということが、この検討会のところでも大きなミッションです。ですから、その中身を度外視するわけではなく、それは西澤委員の御指摘のように考えていかなければいけない。

このことに関しては、結局、グルース学長が毎回のように主張されているハイトラストファンドというコンセプト、これとのマッチングということも当然出てくる場所であります。

そういうことで、現在のところのクラフトケーションは、必ずしも明解ではないので、工夫できるところは工夫するようにいたしますが、ただ、基本的にはそういうところがありますので、そこについての御理解をしていただければと思います。

○西澤委員 そこは理解した上で、前から議論されている産学連携の成果も含めて、それを最終的に明確にするのは、恐らくサードミッションの場合には、財務的な成果ではないかと考えておまして、そういう意味では、増やすべき部分の中身がもうちょっと整理を

した上でどう増やしていくのか。

学術的なものについては、ハイトラストファンド、国費の部分を科研費とか、そういう外部資金でどう拡充するのかということはもちろんなのですが、産学連携系も全てハイトラストファンドでいけるのかどうかということは、本当に世界のトップ大学の潮流に合っているのかどうかは、非常に疑問に思っていますので、そこは1回きちっと検討していただいたほうがいいのではないかという問題意識です。

○相澤座長 ただいまの視点は、当然これからの特に今後、検討していくところに大きな課題になることは確かでありますので、そこで検討させていただきたいと思います。

○西澤委員 よろしく願いいたします。

○相澤座長 そのほかはいかがでしょうか。

特段ございませんようですので、「5. 財務」についての検討は以上とさせていただきます。

ただいまずっと各項目について、議論していただきましたが、評価項目というのは、それぞれについて、現段階で判断できることをあらあらに書いてあります。そして、評価項目ごとの評価の最後には、今後、検討するようなこと、あるいは期待していることというようなことが書かれておりますので、今後、これは全てさらに検討を深めるという対象になります。

それでは、こういう形で、今、全体を検討していただきましたけれども、最後のセッションのまとめということでは、中間取りまとめの一番最後のところに「IV. 今後の総括的議論に向けた留意点」を御覧いただきたいと思います。

この前、議長提案として、こういうような四つの柱で検討を進めるという方向性を示す。これは大きな柱であるわけで、前回から変えておりません。修文が少し出てきたようでありますけれども、現段階では、こういうような方向で進むのだということだけにとどめて、文章の表現を詳細に検討するところは、ちょっと置かせていただいて、こういう方向性と、先ほど来、各評価項目の評価という部分に出てきたことが、今後の課題として残されていることがたくさんあります。そういうものをこういうところに組み込みながら、今後は全体感をつかめるような形で進めていきたいと思います。

それでは、ただいまのような進め方であるということ、ここで御意見はございますでしょうか。

そこまでをそういう形で御理解いただければ、これから最終取りまとめに向けては、どうということ、検討を進めるかということ、中島次長より説明をお願いいたします。

○中島次長 それでは、資料4を御覧ください。最終取りまとめに向けた確認事項等についてということで、1枚紙を用意させていただいております。

最終取りまとめに向けて、これまでの検討会での議論を踏まえて、確認すべき事項や補うべき観点としてまとめたものでございます。

中間取りまとめとの記載とも一部重複をいたしますけれども、組織運営に関しましては、

これまでに構築された組織運営体制の下、学園と大学は効果的に運営され、機能しているのか。

あと、教育研究に関しては、教育や支援が学生にとって満足するものになっているのか。また、研究実施体制は、研究者にとって満足するものになっているのか。

沖縄振興に関して、イノベーション・エコシステムの構築に向けたOISTと県内機関との連携・意思疎通を効果的なものとするには、どのような取組が必要か。OISTの教育研究を沖縄の教育や科学技術の発展につなげていくために、どのような取組が必要か。

このように資料で用意させていただいておりましたが、先ほどいろいろ御意見をいただきましたので、そういったところも今後を確認すべき事項になるべき観点だと思っております。

上記事項・観点につきまして、理事とか、評議員とか、教員や学生、また、沖縄県とか、沖縄県内の自治体、沖縄県の経済界の方々にヒアリングを実施することとしてはどうかと考えております。

実施時期としては、10月から12月としておりますけれども、新型コロナの状況ということもございますので、場合によっては、ウェブでの実施ということになるかもしれません。

ヒアリングには、2～3名の委員の方に御参加いただくことを考えておりますけれども、実施方法とか、ヒアリングの日程、具体的な質問項目につきましては、御相談をさせていただきたいと考えています。

以上です。

○相澤座長 先ほど私が中間取りまとめ全体と今後の最終取りまとめに向けてのまとめ方、2段階をつなげて説明させていただきました。

そこで、これからただいまの今後の進め方も含めて、全体的に御意見等がございましたら、お伺いをしていきたいと思っております。いかがでしょうか。

秋からヒアリング形式でいろいろなことを進めなければいけないので、コロナの状況がどうなるかということが大きな問題になりますので、具体的にどう進めるかをこれから検討しなければいけないと思っております。

それでは、特段御意見はございませんようなので、本日の検討会の議事につきましては、以上とさせていただきます。

全体のまとめについては、改めて事務局とも相談させていただいて、まとめてまいります。そのまとめ方については、御一任をいただけますでしょうか。

○○○ よろしくお願いたします。

○相澤座長 それでは、結果については、もちろん皆様に開示させていただきます。

それでは、今後の進め方等について、中島次長からよろしくお願いたします。

○中島次長 次回のOIST検討会でございますけれども、先ほど御説明しましたとおり、改めて御連絡をさせていただくということにしたいと思っております。

○相澤座長 ただいま原局長も同席されておりますので、一言ございましたら、よろしくお

願います。

○原沖繩振興局長 真摯な御議論を誠にありがとうございました。

今後の進め方につきましても、座長等々と相談しながら、ヒアリングを中心にこれまでの議論で足りなかった部分等々を補完していくといたしますか、より完成度を高めていくという方向でお願いいたしたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○相澤座長 それでは、今日も変則的な会議形式でございましたけれども、全員出席の下で会議を進めることができました。皆様の御協力に誠にありがとうございます。感謝申し上げます。

それでは、これで終了させていただきます。